



さい帯血バンク NOW

2011年7月15日発行

日本さい帯血バンクネットワーク

発行者：中林正雄（会長）

〒105-0012 東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社西館5階

TEL 03-5777-2429 FAX 03-5777-2417

<http://www.j-cord.gr.jp/>

第60号

中四国臍帯血バンクが 解散へ

6月26日に開催された日本さい帯血バンクネットワークの通常総会で、中国四国臍帯血バンクの土肥博雄代表から、中四国バンクは今年度末をもって解散することを決めた、との報告がありました。

これは日本赤十字社から「さい帯血バンクの設置について様々な要件を検討した結果、現時点では全国4か所に設置することとし、中四国ブロックには設置しない」旨の通知があったことにより、同バンクは理事会を開催して解散を決議したものです。これまで同バンクが保存提供してきたさい帯血の今後の取り扱いについては、どのような形で継続されるかの詳細はこれから

検討されることになります。

これまで全国11バンク体制で実施されてきたわが国の公的さい帯血バンク事業は、昨年の神奈川臍帯血バンクの日赤東京さい帯血バンクへの統合に続き、中四国バンクの解散によりさい帯血バンクの集約化がさらに進むことになりました。今後の日本さい帯血バン

クネットワークの活動は全国9バンク体制で運営されることになります。

また今回の事態は、これまでは各地の赤十字血液センターが運営してきた日赤系さい帯血バンクが、日本赤十字社の事業として実施されていくことが、正式に決定されたものとして注目されます。

将来構想検討会が「中間報告」

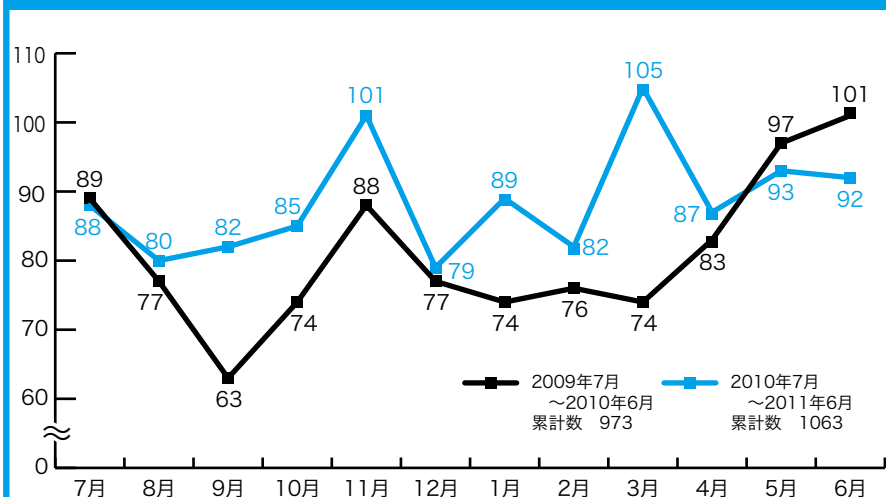
日本さい帯血バンクネットワークでは将来構想検討会（神前昌敏委員長）を設置して、これからのさい帯血バンクのあり方を論議してきましたが、こ

のほど中間報告をまとめ、6月26日の総会に報告されました。

この中間報告では、これまでのさい帯血バンク事業の総括と、医療サイドの要望に応えるための今後のさい帯血提供について、その基本的な考え方をまとめるとともに、安定した事業運営のために「将来構想としての考察」を明らかにしています。それは、単にさい帯血バンクの範疇に留まらず、骨髓バンクを含めた造血細胞提供システムの将来像にも踏み込むものとなっています。この「中間報告」は近くホームページでも公開されることになっています。

非血縁間さい帯血移植状況(2011年7月1日現在の速報値)

移植数（累計） **7521** 公開数 **33001**



※複数さい帯血移植数を換算しています。





2011年 広島発 さい帯血バンク推進全国大会

会場が変更になりました

日本さい帯血バンクネットワークは、今年で12年目を迎え、非血縁者間の移植症例数は7,400例を超えました。また、今年に入ってから昨年は大きく上回る移植症例数となって今年中には8,000例を超える勢いです。この大会では、わが国におけるさい帯血バンク事業の現状、さい帯移植の実績や治療成績の発表などの年次報告を行うとともに、わが国のさい帯血バンク関係者が広島に会して、さらなる躍進を誓い合う機会です。

また、3月11日に発生した東日本大震災を受け、改めて課題となった危機

管理について「今だから見直そう、さい帯血バンクの危機管理」をテーマにシンポジウムを開催し、参加者全員でさい帯血事業の危機管理について考えることにしました。

ぜひとも、多くの皆さんが広島にお集まりいただき、実りある全国大会にしたいと思います。また、会場が従来お知らせしていたところから変更になりました。

【シンポジウム趣旨】私たちが想定していた規模を大きく超える東日本大震災は、未曾有の被害をもたらしまし

た。こうした天変地異による自然災害だけでなく、国際的なテロなどの事件や、スタッフによる些細な人為的ミスから発生する大事故、さらには新型感染症の蔓延など、予知がきわめて難しく、突然やってくる危機は、事業の存続さえも脅かしかねません。

こうした危機への対応策を事前に備えることが求められていますが、残念ながらさい帯血バンク事業ではその準備がほとんど整っていない状況です。

「人は間違いを犯すものである」という前提のもとに、誤作動や誤操作があった時でも安全に制御しようというのがフェイルセーフの考え方です。

危機を事前に予見し、その発生を予防するために必要なのがリスクマネジメントです。一方、緊急事態発生後の危機に対処する方法がクライシスマネジメントです。まず、発生中の被害を最小限に食い止め、次に拡大を防止し、さらに応急対策を実施して、最後には正常な状態に戻すことが求められます。

また、危機的事態を迎えた時に不可欠なのは情報の公開です。たとえ不祥事の場合であっても、適切で迅速な情報のディスクローズは欠かせません。さい帯血バンク事業は国民の善意を基本にした公的事业という背景があるからこそ、迅速な情報公開システムの構築も欠かせません。

災害や事件、事故に限らず、事業に危機的状況をもたらす可能性のある人為的なアクシデントなどがあった場合は、速やかな報告を行い、被害を最小限に食い止め、再発を防止する措置をとらなければなりません。現在、そうした場合の報告義務は制度化されていませんが、様々な基準から逸脱した行為があった時、スタッフの過誤や錯誤から生じた事故などに、即座に対処できるシステムの構築が急がれます。

日時：平成23年9月17日（土）

開場：午後1時30分

開始：午後2時

会場：広島大学医学部 広仁会館「大会議室」

（広島市南区霞1丁目2番3号）電話082-257-5098

広島駅より広電バスで大学病院行「大学病院（終点）」

下車3分

主催：日本さい帯血バンクネットワーク

協力：中国四国臍帯血バンク

後援：（予定）厚生労働省、日本赤十字社、特定非営利活動法人さい帯血国際患者支援の会、財団法人骨髄移植推進財団、特定非営利活動法人全国骨髄バンク推進連絡協議会

【プログラム】

第1部 午後2時～

- 主催者挨拶
- 来賓ご挨拶
- 事業年次報告

第2部 午後3時30分～

●シンポジウム

「今だから見直そう、さい帯血バンクの危機管理」

東日本大震災と宮城さい帯血バンク

危機管理の考え方

さい帯血バンクの危機管理

パネルディスカッション

第3部 午後6時～

- 懇親会（会費制）



年度でもさい帯血年間移植数は1000例超

月間では骨髄バンクをしのぐ月も

昨年、さい帯血移植の症例数が年間1000例を超え、過去最高数を記録したことは本誌第57号でお伝えしたとおりですが、年度でも1072例の移植が行われて過去最高の移植症例数となりました。1997年2月にさい帯血バンクが提供したさい帯血によりわが国で最初のさい帯血移植が行われましたが、それ以後順調に移植症例数を伸ばしてきましたが、図①のように年間の移植症例数を骨髄移植と比べると、年間200例

～400例の移植数の差がありました。

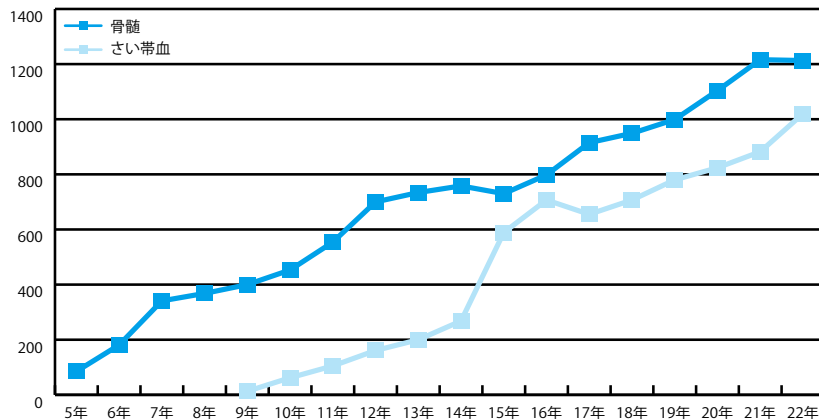
しかし、昨年度は骨髄バンクの移植症例数1192例に対し、さい帯血移植の1072例を月別に比べてみると（図②）、これまで一度もさい帯血移植症例数は骨髄移植を上回ったことはありませんでしたが、5月、11月、2011年3月と3回もさい帯血が骨髄を上回っていたことが分かります。

また、先の東日本大震災の時、さまざまな理由により骨髄移植予定の患者

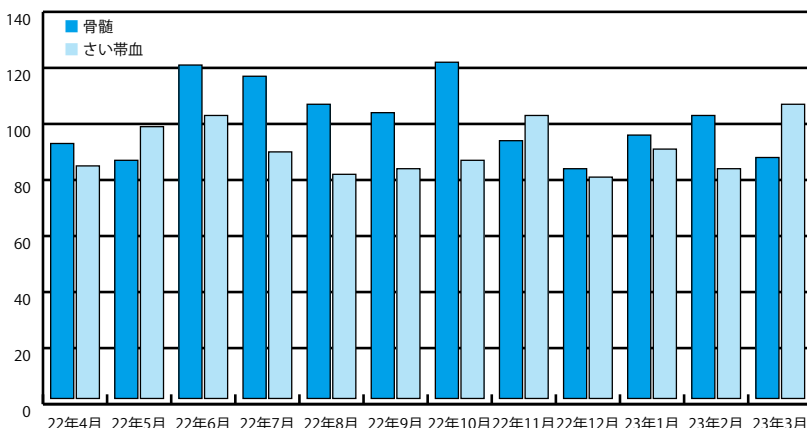
さんがさい帯血移植に変更となった例が2例ありました。一昨年の新型インフルエンザが流行した時に骨髄からさい帯血へと変更になったこと合わせ、さい帯血バンクと骨髄バンクが治療の両輪として機能していることを感じさせられます。

さい帯血バンクでは、移植成績向上のため、より品質と安全性の高いさい帯血を提供していくこと。より多くの細胞を保存できるよう努力を重ねてまいります。

①年間移植数推移（合計）



②月間移植数比較（年度）



■善意のお気持ちに感謝します■

愛知県	下野 修様	300,000円
千葉県	匿名希望	150,000円
大阪府	福田 博行様	20,000円
埼玉県	大寺 信行様	6,000円

〈寄付受け付け専用口座〉

●郵便局からの振り込み

00180-9-57390

●他の金融機関からの振り込み

金融機関名：ゆうちょ銀行

金融機関コード：9900

支店番号：019（銀行のATMから当ネットワークへ寄付金を送金する場合は支店名は『ゼロイチキュー』と入力してください。）

預金種目：当座

口座番号：0057390

口座名義：日本さい帯血バンクネットワーク



すこやかに、幸せに。
明日への夢、描きたい。

人から人へ、心から心へ、医療という名のヒューマンなコミュニケーションを広げたい。真の健康を守り、幸福な社会を築くために、優れた医療器具を広くおとどけしているニプロ。

私たちニプロはさい帯血を採取保存する技術でさい帯血バンクを応援致します。



ニプロ株式会社
大阪市北区本庄西3丁目9番3号



移植病院 訪問

⑭ 川崎医科大学病院

若い移植病院で高齢者に

瀬戸内海に面する岡山県倉敷市は倉敷川沿の白壁の町並みが「美観地区」として有名な観光地ですが、そののどかな郊外にあるのが川崎医科大学付属病院です。よく、神奈川県の川崎市と誤解されることも多いようですが「川崎」は創立者の名がその由来で、神奈川とは全く関係がありません。

川崎医大の血液内科

川崎医大の血液内科は、先天性溶血性貧血の専門的な検査ができる国内では数少ない病院として有名で、全国から診断の相談が寄せられています。とはいえ、溶血性貧血の入院患者さんはわずかで、血液悪性疾患が年々増えているそうです。ここで造血細胞移植が始まったのは1994年の自家末梢血幹細胞移植からで、血縁者間の同種末梢血幹細胞移植は2002年からですから、比較的若い移植病院と言うことができるでしょう。

全国3位の症例数に

2005年からは血縁者間の骨髄移植も行い、少しずつ症例を積み重ねて2005年からはさい帯血バンクの登録病院になりましたが、何と2009年には一挙に20例のさい帯血移植を実施して、さい帯血移植数では全国で第3位を記録しました。ちなみにこの年の1位は虎の門病院、2位は北九州市立医療センターでした。川崎医大も北九州医療センターも骨髄バンクの認定病院にはなっていないので、これらの施設はさい帯血移植が特徴的な病院ということができそうです。

移植でも さい帯血移植に特化

血液内科の和田秀穂教授は「岡山県には造血細胞移植ができる病院がた

くさんあります。

もともと岡山大学病院は血液内科が盛んでしたし、倉敷中央病院では骨髄バンクの非血縁者間骨髄移植を積極的に行っています。そんな環境の中からさい帯

血移植といううちの特徴ができてきたんでしょうね」とその背景を語っています。現在は骨髄バンクの認定病院としても申請中で、さい帯血移植で積んだ実力をあらゆる移植ニーズに応えられるようにしていく、と積極的な姿勢をみせています。

高齢者移植でも 好成績

川崎医大には12室の無菌室があってさい帯血移植に臨んでいます。最近ではコンスタントに毎年20数例の同種移植を行うようになりました。移植担当の松橋佳子医師は「うちは高齢者の移植が多いんです。これまでに67例のさい帯血移植を行っています。患者さんの年齢は中央値で59歳です」と川崎医大のさい帯血移植の特徴を語ってくれました。確かに、67例の移植患者で年齢は20代は2人、30代は3人ですが、50代は24人、60代は25人もいます。また「非寛解での移植も多く、ハイリス



クとスタンダードリスクでは3：1でハイリスクが多いんです」とのことですが、移植成績もなかなかのものです。

さい帯血移植と GVHDの低さ

スタンダードリスクでの移植成績（生存率）は70%になりますが、ハイリスクだと30%に落ちるそうです。でも、そうした患者さんたちはこれまですべて亡くなっていたことを考えると、さい帯血はこれまで移植ができなかった患者さんたちにも生きる機会を与えることができたのではないのでしょうか。田坂大象准教授は「さい帯血移植はGVHDが少ないというのも移植患者さんの生活の質を考えると重要ですね。ひどいGVHDで苦しんでいる方を見るとそう思います。これからは低いGVHDで高いGVL効果を出せるようにしていきたいですね」と今後の抱負を語っています。